

書評：藤田一郎「『見る』とはどういうことか 脳と心の関係をさぐる」

神奈川県リハビリテーション病院眼科 仲泊 聡

これは、藤田一郎氏の自伝です。と思えるほど、著者の気合いの入れ方が伝わってくる本です。あとがきによりますと、大阪大学の学部二年生を対象とした脳科学入門の授業の内容だそうで、初心者でもわかりやすくなるように用語の解説には平易な表現が用いられており、これから視覚科学や脳科学を勉強しようとする人には打って付けです。

詳しくは、実際に読んでみてほしいのですが、怒られない程度に内容をご紹介すると、第1章では、多くの錯視図形を提示することで、目に映った像が意識に上るものと同じとは限らないということを示し、見ることもれっきとした心的現象であることを述べています。第2章では、脳損傷による不可思議な症状から、見ることに於いて主観体験と「見ることに依存して行動を起こすこと」が独立して生じるということ述べています。第3章では、脳が行なっている情報処理の概要を大づかみに解説しています。第4章では、脳地図と刺激選択性を軸に大脳視覚野の構造について概説しています。ここまでは、藤田氏が述べるように平易で取っ付きやすく、逆に言えば他にも似たような著書があるかもしれません。しかし続く2章は、まさに藤田氏と彼を取り巻く脳科学の最先端の息吹が伝わってくる本書の核心となります。そのひとつ、第5章では、主観的輪郭、両眼視野闘争、ローカルモーションとグローバルモーションなどを用いて世界中の脳科学者が「意識の神経相関」を求めた試行錯誤が小気味よくまとまっています。そして第6章では、まさにこの10年の藤田研究室の歩みといっても過言ではない、両眼立体視の腹側経路での情報処理をテーマに大脳研究の醍醐味を感じつつ、脳と心の関係を考えさせ

られます。そして最終章の第7章は、脳科学と哲学の間の微妙な関係についてエピソードを交え、楽しく紹介されています。

最近、私は公私にわたり忙しく、今回の書評の依頼に対してもタイムリーに書けるか保証できませんよと無責任な返事をしていました。ところが、手に取ったその日に引き込まれるように読みふけり、他の仕事をそっちのけで読破してしまいました。第5章と第6章について、著者は平易な文章にならなかった、「力不足を痛感する」とあとがきで述べていますが、ここが一番の読みどころです。そして、ここを理解しやすくするように、それまでの記述が計算されて配置されているのです。憎い限りです。学生ばかりではなく、視覚研究をされている先生方も是非お読みになることをお勧め致します。

データ

藤田一郎：「『見る』とはどういうことか 脳と心の関係をさぐる」

A6版 220頁 ソフトカバー

化学同人 平成19年5月20日発行

定価 1600円＋税

目次

- 第1章 見るなんて、心のうち？
- 第2章 知覚と行動のつじつま
- 第3章 見るための脳の仕事
- 第4章 見る脳を覗く
- 第5章 心をつかさどるニューロン活動を求めて
- 第6章 二つの目で見ると
- 第7章 脳、心、脳科学と私